

キャッサバの種茎は銀行と同じだ

—ザンビア農村の生活世界—

原 将 也*

2011年9月21日、ザンビア大統領選挙の投票日の翌日に、私は初めてアフリカ・ザンビアの大地に降り立った。ザンビアはおおらかで、親切な人が多くゆったりとした国だと聞いていたものの、空港から宿へ移動する間、私は周囲のなんともいえない緊張した雰囲気を感じていた。ザンビアは、期待と不安が入り混じった空気に包まれていた。ザンビアでは1991年に複数政党制が導入されて以来、長年にわたってMMD（複数政党制民主主義運動：Movement for Multiparty Democracy）が政権を握ってきた。そのためアフリカのなかでは、比較的政治が安定している国だと称されてきた。しかし2006年の大統領選挙では、野党であるPF（愛国戦線：Patriotic Front）候補のマイケル・サタ氏が与党MMD候補のレヴィー・ムワナワサ大統領に迫り、政権交代が実現する一歩手前であった。今回の選挙では、PF候補のサタ氏が都市部の労働者を中心に支持を集め、政権交代が確実だとされていた。そして9月23日の未明、選挙結果が発表され、サタ新大統領が誕生した。偶然にも私は、20年

にもわたってつづいたMMD政権に終止符が打たれ、ザンビアの新たな幕が開けた瞬間を人びとと共有することとなった。

私の調査地は、ザンビア北西部州ムフンブウェ県という首都ルサカから約800kmも離れた遠隔地である。私が住みこみで調査している農村にはカオンデ、ルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジという民族の人びとがともに住んでいる。彼らは焼畑農耕を営みながら、漁撈や狩猟、採集も営んでいる。焼畑で栽培される主な作物は、自給用のモロコシとキャッサバである。カオンデ以外の人びとが、モロコシを栽培することはないが、キャッサバは多くの人びとによって栽培されている。焼畑のほかには、政府機関である食糧備蓄庁（FRA：Food Reserve Agency）から安価に販売される化学肥料を使用したトウモロコシ栽培が営まれており、多くの人びとはこのトウモロコシを食糧備蓄庁に販売することで現金を入手している。

政権が交代してから、このトウモロコシ栽培に変化が起きている。前年分の売上金がいっただけ経っても支払われず、化学肥料は遅配

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／日本学術振興会特別研究員（DC）

され、適切な施肥時期を過ぎてから届くようになったのである。「前政権の MMD のときには、11 月には化学肥料が来て、施肥できたのに、今年（2011/2012 年度）は 1 月に届いたよ。現政権の PF は農業政策に熱心じゃない」と私の住みこみ先のご主人ルーウィは、あきらめ顔で教えてくれた。1 月といえ、トウモロコシの草丈は人の背丈と変わらない。本来ならばトウモロコシの草丈が、膝の高さと腰の高さのときの 2 回にわけて施肥する必要がある。

2011/2012 年度には化学肥料の遅配のため、トウモロコシの収量が悪く、ルーウィは自給分しか収穫できず、食糧備蓄庁に出荷し、現金収入を得ることができなかった。化学肥料の遅配はザンビア国内においても問題にされており、ザンビアの大衆紙 *The Post* には、化学肥料の遅配を皮肉した風刺画が掲載されるほどである。さらに 2012/2013 年度には、化学肥料の遅配のほかに、各地区に設けられていた集荷場所も減った。私の調査地には集荷場所が無くなり、人びとは 10 km も離れた隣の地区まで、重さが 50 kg もあるトウモロコシの袋を何十袋も運ばなければならなくなった。そこでトラックを所有する人びとが、新たに運送業をはじめ、トウモロコシ 1 袋につき 3 クワチャ（約 55 円）で、隣の地区まで運ぶようになった。トラックの所有者にとっては新たな商機となったが、農民にとっては新たな経済的な負担となった。農民にとって重要な現金収入源であるトウモロコシの栽培が、立ち行かなくなりつつある。

新政権の方針は、鉱工業セクターの強化で

あり、国民の大部分が従事する農業セクターはないがしろにされつつある。先の大統領選でも PF を支持したのは都市部の労働者層であり、とくに銅鉱山や多くの工場が立地するコッパーベルト州を中心に、圧倒的な強さを誇っていた。一方、北西部州のように、農業が主産業である農村部では MMD に票が集まった。村びとは口々に MMD の良さを語り、ときには PF の政策を揶揄することもある。政権交代によってみずからの収入源が揺らぎ、村びとはこれからどのように農村で生活していくのだろうか。選挙直後にザンビア入りしたことで、私は農村における日常生活の視点から、ザンビアの政治動向について注目するようになった。

「キャッサバの種茎は銀行と同じだ。」この言葉は、ルーウィの口癖である。キャッサバは、30 cm ほどに切りわけた茎を、地面に対して斜めに挿すことで植えつけられる（写真 1）。この最初に植えつける 30 cm ほどの茎がキャッサバの種茎であり、キャッサバを種子から栽培することはない。植えつけ後 2 年から 3 年が経つと、キャッサバのイモが収



写真 1 雨季の初め、キャッサバの種茎をマウンドに植えつける（2011 年 11 月 7 日撮影）

穫されはじめる。イモの収穫時には、株ごと引き抜いてしまわず、肥大したイモだけを収穫し、土をかぶせて元の状態に戻す。植えつけ後4年以上が経過すると、イモが繊維質で固くなってしまうため、株ごと引き抜く。そのときの茎が、種茎として利用される。

村びとは日常生活のなかで、キャッサバをシマという練り粥にして食べている。シマはザンビアの一般的な主食であり、トウモロコシやモロコシ、シコクピエなどの穀物の粉から作られる。村における毎日の食事では、キャッサバのシマと葉菜の炒めもの、インゲンマメの煮物、ときに鶏肉やヤギ、ブタの肉がごちそうとして提供される。キャッサバのシマは、穀物から作ったシマと違い、わらびもちのような弾力がある。しかし発酵した特有の風味がするため、初めて食べる人には苦手な人が多く、ザンビア人でも好き嫌いが激しい。その風味の原因は、毒抜き行程にある。キャッサバには、青酸配糖体として有毒成分が含まれているため、毒抜きをする必要がある。収穫後、生のイモを水に浸け、皮と芯を取り除くことで有毒成分を除去できる(写真2)。暑い乾季であれば、収穫から毒抜き、日干し乾燥、製粉までの行程を3日間でおこなうことができるが、雨季では乾燥させるのに、火を用いるため、5日ほどかかる(写真3)。キャッサバのイモはシマだけでなく、生で食べたり、ゆでて食べたりすることができ、間食としても重宝されている。また葉は、おかずとして日常的に利用されている。キャッサバは食べるまでに手間がかかるが、村びとの生活にとって、欠かせない作物



写真2 毒抜き後、キャッサバのイモの皮をむく。毒抜きから調理までの行程は、女性の仕事である(2012年6月24日撮影)

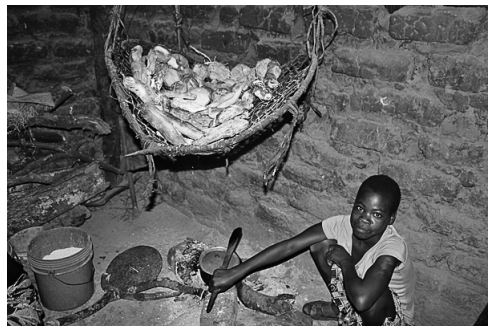


写真3 皮をむいた後のキャッサバを、火のうで乾燥させる。なかなか乾燥しない雨季の工夫である(2012年12月25日撮影)

である。

「キャッサバの種茎は銀行と同じだ」というのはどういう意味なのか。ある日、私はルーウィに聞いてみた。貯めておけて、いつでも増やせる。そして、必要なときに引き出すことができるからだと彼は私に説明した。キャッサバのイモは掘り取らなければ、何年も「貯める」ことができる。そして一度に収穫することなく、いつでも必要に応じて「引き出す」ことができるのである。植えつけの際には、茎を植えつけるだけで容易に「増や

す」ことができる。彼はキャッサバの種茎を「銀行」、イモを「財産」に見立てている。

ザンビアでは、1980年代後半から急激なインフレーションが進行した結果、通貨の価値は下がりつづけ、ザンビア政府は2013年1月1日にデノミネーションを実施し、10,000 クワチャは新たに10 クワチャとなった。ザンビアの銀行における預金金利は、1990年代後半には年率30%台、2000年代前半には年率20%台を推移した。ザンビア国内の経済状況は年々変化しつづけ、銀行や貨幣の価値は不安定な状況にある。このような不安定な社会情勢がつづくなかで、ルーウィはキャッサバの栽培に生活の安定を求め、みずからの生活を支えようとしている。彼が銀行の預金金利をつぶさに理解しているとは思えないが、銀行に預金するのと同様に、キャッサバのイモを畑で増やし、多く収穫しようと努めている。

ルーウィはキャッサバのイモを、必要に応じて引き出し、ときには種茎やイモを近親者に贈与することもある。村びとはキャッサバの安定性と多収性を十分に認識し、それをうまく利用しながら生活を営んでいる。2012/2013年度には、ルーウィは政権交代によって不安定になったトウモロコシ栽培を縮小する一方で、精力的にキャッサバ畑を開墾している。彼は、「いつどうなるかわからない不安定なトウモロコシ栽培よりも、キャッサバ栽培を中心にしたい」と強く語る。

私は選挙直後に渡航したことで、政権交代というマクロな国内政治の動きによって生じた社会の変化を、農村の生活を調査するなかで垣間見ることができた。政権交代という政治の動きによって生じた変化に対して、村びとはみずからの生活基盤を変えることなく、状況に応じて対処する。ルーウィはキャッサバ栽培を拡大することで、みずからの生活に安定をもたらそうとしている。社会や経済システムが激動するアフリカにおいて、生活を安定させようとする彼らの生きる力には、いつも驚かされる。

不安定な状況にあるにもかかわらず、村びとの普段の生活は、とても平穏である。私が調査のため村で生活していると、退屈で仕方がないときがしばしばある。毎日が平穏すぎて「もう村にいたくない。早く日本に帰りたい」と思うこともよくある。しかし長く村にいと、政権交代により農業政策が変化し、肥料供給システムが変わるように、決して彼らの生活が平穏で安定しているものではないことがわかってきた。そんなとき彼らは、不安定な状況を心配した私に対して、「キャッサバを栽培していれば大丈夫だ」と笑顔で語る。彼らは将来への不安や社会への不満を抱えながらも、変化を受け入れて生活の安定をめざし、粛々と生きていく。村の「銀行」は、村びとに生きる糧を与え、日々の生活を平穏なものにしている。